

## //REPORT//

# ユネスコスクールオンライン意見交換会

8/25 開催 第1回「コロナ禍における持続可能な社会・持続可能な学校とは(その1)」



2020年度よりユネスコスクール事務局はユネスコスクールオンライン意見交換会を1か月～2か月に1回のペースで実施することとなりました。今回はその記念すべき1回目。「コロナ禍における持続可能な社会・持続可能な学校とは」と題して、9名の参加者とともに対話の場をもちました。

### ■プログラム

開催日時:2020年8月25日(火) 16:00～17:00

時間	内容
16:00	<b>オープニング</b> 趣旨説明・自己紹介
16:05	<b>事例紹介</b> 神奈川県ユネスコスクール連絡協議会 事務局長 望月 浩明氏
16:20	コメント 玉川大学 教育学部 教授 小林 亮氏
16:25	<b>グループディスカッション(1グループ:3～4名)</b> 事例紹介を聞き感じたこと、各校の取り組みをお互いに共有します。
16:45	<b>振り返り</b> グループ毎に、ディスカッションで話したことを発表します。(良かった点、学んだこと、今後活かしたいこと、改善点、メリット・デメリット等)
17:00	<b>クロージングと事務連絡</b>

### ■ コロナ禍の学校の現状とユネスコスクール活動

はじめに神奈川県ユネスコスクール連絡協議会事務局長の望月浩明氏に「現在のユネスコスクール活動状況」をテーマに話題提供いただきました。神奈川県ユネスコスクールでは、定期的に近況を報告し合う交流の場をもっています。その交流の場で、コロナ禍で教育活動を進めていく中で「地域との繋がりが難しくなっている」「海外の学校との交流が難しくなっている」「込み合う時間によっては Zoom が繋がりにくくなる」「対面、体験形式の学習が難しくなった」「講師を招いた講演会ができなくなった」「校外学習ができなくなった」などの課題が共有されたとのことでした。そのような状況下で

も、校舎の窓に「みんなでのりこえよう」というメッセージを掲示したり、学校菜園で育てた野菜を地域のカフェに届けたりするなど、地域との繋がりを何とか継続させていく工夫を見出したり、オンラインを活用して、他校との交流をより一層深めたり、個人で深める時間を活かした探求学習を実施したりするなど、学校の現状に合わせた解決策を見出す学校が多くあったということでした。今回は、その中でも日本野鳥の会が主催する「ツバメ観察プロジェクト」の取組事例についてふれ、外部団体の協力の下、海外の学校との協働学習が実施された経緯と取組内容について詳しい情報共有がなされました。

### ■ 新たな学びの場をどのように作るか

ASPUivNet 加盟大学でユネスコスクールを支援する立場でありながら、大学の教育学部自体もユネスコスクールに加盟をしている玉川大学の小林亮教授より話題提供を受けて、下記のコメントをいただきました。

- ユネスコスクールは ESD 推進拠点であり、このコロナ禍だからこそ「持続可能性とは何か」を問い、深く掘り下げいくこと、そして、コロナが去った後も重要になる新たな学びの場をどのように作るかを考えていく視点が重要である。
- 韓国のとあるイベントに参加した際、韓国の学校が日本の学校と同じ課題に直面していることを知った。他国と経験を共有していくとよいと思う。
- 他団体の協力を得て海外連携をする事例である「ツバメ観察プロジェクト」は、非常にユネスコスクールの取組らしく素晴らしい。ツバメを通じて、人間の生活や自然との関わりを学ぶことができる点でも、持続可能性につながるテーマである。
- ESD にとって「つながり」は重要なキーワードである。これまで気が付かなかった新たな「つながり」が潜在的にあると思うので、事例を参考にしながら、開拓していくことが、わたしたちに課せられている挑戦なのではないかと感じている。

### ■ コロナ禍だからこそ得た気づき

望月事務局長の話題提供と小林教授からのコメントを受け、参加者同士の対話の場が持たれました。以下、話し合われた主な内容です。

- これまで海外の学校と交流する際は、訪問するという方法のみ念頭に置いていたが、コロナ禍にオンラインの可能性を知ることができて、海外の学校と簡単に繋がることを知った。
- 緊急事態宣言後に、インターネット格差できないよう休校になった学校が多いと聞かすが、自分たちの学校は、それでも、とりあえずやってみようということでオンライン授業を進めていった。大体の家庭はインターネットが開通しており問題が無かったが、中にはインターネット回線のない家庭もある。そういった家庭には課題を配布するなど対応した。またきょうだいがいる場合は家庭に PC やタブレット等の機器が足りない家庭もあったため、学校で貸し出しをしていた。それでも対応が難しい家庭の児童生徒や在宅勤務している保護者が児童のオンライン授業のサポートが大変な時は登校してもらうなど、コロナの状況下において、逆に家庭環境の状況に合わせた学習

スタイルを模索していくチャンスを与えてもらえたと感じている。

- コロナ禍で遠くに出かけて活動できなくなった分、地域との交流が増えた。
- なかなか会えない著名人にオンラインで会うなど、普段ではなかなかできないことをやってみるチャンスも生まれているのではないか。
- 小学校高学年からは、インターネットを活用した授業を普段から積極的におこなっていくとよいと思った。日頃からオンラインを活用している子どもたちは、オンライン学習への取組も早く頼もしい。
- コロナ禍だからこそ、ASPUnivNet などの外部団体の知見を活用したり、支援をお願いしたりするとよいと思った。
- ACCU が海外のユネスコスクールとのマッチングしてくれることを初めて知った。
- コロナ禍において、社会から取り残されている子どもたち(外国籍の子どもたちなど)がどのような状況で学習を進めているのかを学校同士で積極的に状況を伝え合う工夫ができるとよいと思った。コロナ禍だからこそ、普段気にしなかったことも「誰一人取り残さない」という視点で考えることができる。
- ユニセフ・ユネスコでは「つながる」ことが公共財であり、尚且つ合理的な配慮に基づいた「公正」を目指す必要がある。対話の中で思いついたが、例えば、海外から一時帰国している日本人学校の子どもたちと日本の学校の子どもたちと繋がる交流の機会があると、身近に海外交流ができ、言葉の壁も無いのでよいのではないか。

※意見交換会終了後、参加校からコロナ禍の現状や SDGs の学習をしているユネスコスクールとオンラインの意見交換会をしたいとの声もいただきおり、今回の意見交換会からユネスコスクール同士の「つながり」も広まっていきそうです。ユネスコスクール事務局では学校間の交流(国内外)のマッチングも行っていますので、ご希望される場合はお気軽にお問い合わせください。

※次回は 2020 年 9 月 29 日(火)16:00~17:00 に「コロナ禍における持続可能な社会・持続可能な学校とは(その 2)」をテーマにした対話の場をもちます。参加方法などは追ってユネスコスクール公式ウェブサイトよりお知らせしますのでお楽しみに！